

戦後 10 年間の建築思潮の動き

浜 口 隆 一

「建築思潮」という言葉を広義に解釈すれば、建築界の全般的な動きということになるだろうが、普通はもうすこし狭義にとって、そうした全般的な情勢を反映した建築家——特にデザイナーたち——の設計上の心理的態度、もっと端的にいえば、デザインの「イズム」ということを意味するといえよう。こうした「建築思潮」について、今日（1955）の時点から振りかえって、戦後 10 年間の経過はどのように跡づけられるだろうか。

ごく大づかみに見ると、この 10 年間は前期（1945～1948）、後期（1948～）に分けられるようだ。敗戦直後、戦火の跡から立ち上ろうとする前期には建築文化運動が盛況だった。（若い世代の建築家たちの革進的グループ、NAU・新日本建築家集団などの活動が代表的であった）。このことは建築を社会と直結させようとする意欲の高まりを意味するが、これがこの前期における最も大きな特徴である。社会の一般的情勢としてこの時期は世界の各国とも大戦争をようやく突きぬけて、悲しみにみちた、しかし民主主義の前進を信じてバラ色の希望に燃えていた時期であり、国際連合が創りだされ、米ソの仲はまだ決して悪くはなっていない。日本についても当然同様であり、アメリカその他の連合国軍が、いわば解放軍として入ってきて日本国民の大部分からもそうしたものとして受け入れられた。「民主化」と「近代化」ということが、素朴に疑問なしに一致して考えられ、前進の目標として信じられた。こうした一般的情勢のもとにあって建築家たちも、物質的にいかにもどん底の条件であろうとも自分たちの仕事を通して、社会の幸福の建設に役立つと強く感じたことは全く無理からぬことであった。そしてこれが「建築と社会の直結」を意欲して、建築運動が猛然として湧きあがった基盤だったのである。しかし、こうしたバラ色の情勢はやがて大きく変わる。資本主義国の盟主アメリカと共産主義国の盟主ソ連との対立が岩礁のように露出してくる。ベルリン封鎖（1948）、中共成立（1949）、朝鮮戦争（1950）と矢つき早やに重大事件がおきてくる。アメリカの極東政策が転換され、当然日本もその影響を深刻に受けることになる。建築界にもそれは強い衝撃として現われる。NAU 集団は分裂し、崩壊する。特需景気による建築ビル・ブームの時期とうらはらに重なりあっており、建築家は現実にお金になる仕事にかりたてられて、建築文化運動どころで

はなくなる。また住宅金融公庫が設立され建築家の眼は庶民住宅の問題から離れて、中産階級の住宅の楽しいデザインへと移ってゆく。建築家はその仕事を通して、そのまま社会の幸福に直結しようというような「バラ色の希望」は無惨にも現実の中で踏みじられた。こうして建築運動のたかまりを特徴とした前期は終り「分裂」の後期がはじまる（1948～）。

後期については、これをさらに二つの時期に分けられるようだ。はじめは思想的な混乱の時期（1948～1952）である。特需景気によるビル・ブームによって混乱は建築界の表面からは、一応隠されていた形であるが、「建築と社会の直結」という建築家にとって理想的状態が夢のように消えて、建築文化運動の崩壊などの混乱現象がおきた。

1952 年にはサンフランシスコ講和条約があり、日本も一応「独立国」となり、民族的自覚もだんだん昂揚してくる。建築界でも幾つかの優れた作品が現われ始め、建築家たちも自信をとりもどしてくる。「分裂」も、もはや一応既成の事実として受け入れられ、悲しみというよりは「それがどうしたというのだ」という居直りの心理状態にむしろ近づいてゆく。さらにこのごろから日本の現代建築作品のうちで、伝統的性格をもつものが海外できわめて高く評価されていることがわかってきた。こうして建築と社会の分裂を意識したまま、しかし建設的な意欲が着実にたかまってゆく。

この時期（1952～1955）を「分裂と共存」とよびたい（何故そうよぶかについては後に述べる）。

以上に概観したように戦後の 10 年は二つないし、三つの時期として考えられる。

1. 前期（1945～48）建築と社会の直結への意欲
2. 後期 I（1948～52）分裂と混乱
3. 後期 II（1952～55）分裂と共存

これらの諸時期について、建築思潮、とくにデザインの「イズム」ということに注目しながら述べてみよう。

機能主義の台頭

前期（1945～48）において「イズム」として最も強く現われたのは機能主義（ファンクショナルリズム）であろう。これは世界的な視野においても、ある程度そうだったが、日本の場合には特にはげしかった。この時期の全般的な特徴は先述のように「建築と社会の直結への意

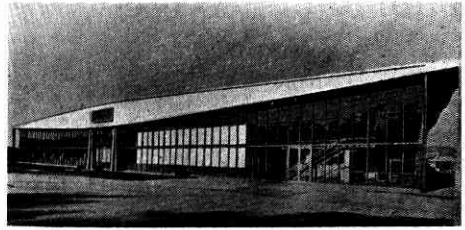
欲」であったが機能主義は敗戦日本の建築家にとって、そうした意欲を実現させる理論的支柱のように感じられたのである。虚飾を排して、構造、材料、平面等の諸機能を合理的に設計することによってのみ正しい建築、美しい建築が与えられるというのが機能主義の中心的な考え方である。倫理的なものと美的なものとの一致である。こうした考え方は資本主義国と共産主義国の矛盾が露出する民主化と近代化が一つに融けあっているといった戦争直後の「バラ色の希望」にみちた時期においてはまことに素直な、必然的な考え方であった。そしてまた現実にはあまり建物の建たなかったこの時期には、理論の非現実性が検証されることがまれで、建築家——特に若い夢想的な世代——の中には拡がってゆき易かった。筆者の書いた「ヒューマンイズムの建築」(1947 刊)はそうした機能主義を高唱したものとして、当時の建築家の気持をややロマンチックに代弁したものだ。同じ年に西山卯三氏は「これからのすまい」を著わして大きな反響をよんだ。それは機能主義を標ぼうするものではなかったが、社会的な住宅問題とデザインとを直結させて、かつ、その結びつきを一応理論的に展開させたものだった。これもまた「バラ色の希望」の前期の産物にふさわしく、民主的なことと近代的なことが甘く一致させられており、そこに示されている提案は、結果としてはきわめて非現実的なものであった。

この前期において、建築思潮的に最大の出来事は建築文化運動のたかまり、進歩的建築団体の結成であろう。終戦後間もない 1946 年に日本建築文化連盟、日本民主建築会、住文化協会等が結成された。

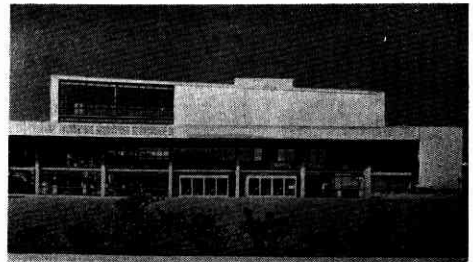
翌 1947 年に、これらが結合してできた新日本建築家集団 N A U は日本の建築運動史上、最大の団体であった(最盛期においてメンバーは約 500 名、各地に支部があった)。「建築家の技術・芸術を人民と直結させる」ことをスローガンとしたが、これは前期の「バラ色」性が濃い間は、若い世代にとってきわめて魅力的であった。

後期 I

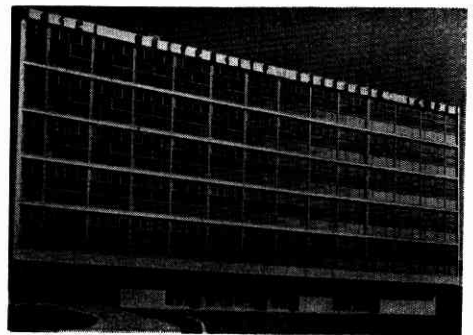
しかし内在していた矛盾は当然露出してくる。それはいろいろな形をとって現われたが「イズム」的な問題としては、最初に現われたのは機能主義に対するマルクス主義的立場をとる人々からの激しい批判であり、それは N A U の機関紙に掲載された函師嘉彦氏の近代建築批判(1949)等が代表的である。それによれば機能主義を中心とする近代建築はタイハイ的な「近代主義」帝国主義のイデオロギー的表現としての「近代主義」だと規定されその克服が論ぜられる。こうして建築運動としての N A U の陣営の内部で、ここに近代主義と反近代主義が対立、戦線分裂がはっきり現われてきた。機能主義に対する批判はマルクス主義の立場からするもののほかに、もう一つ重要なものがあった。それはいってみれば唯美



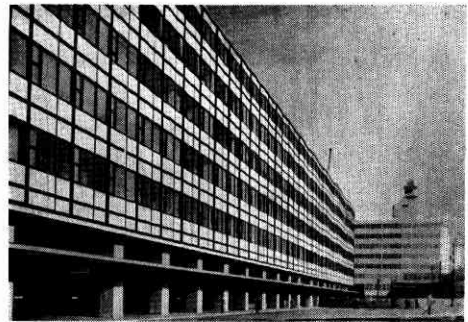
①



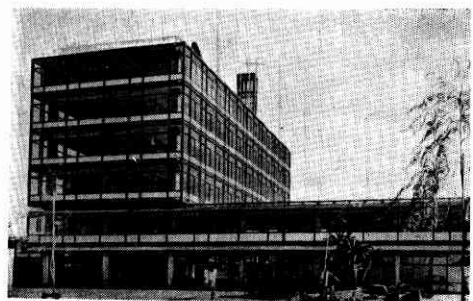
②



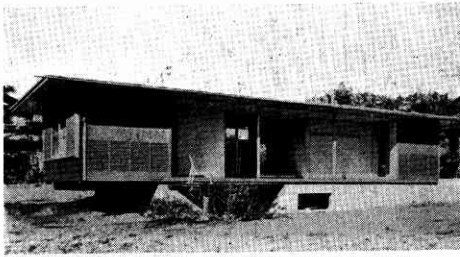
③



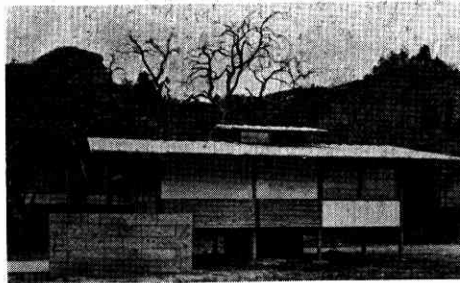
④



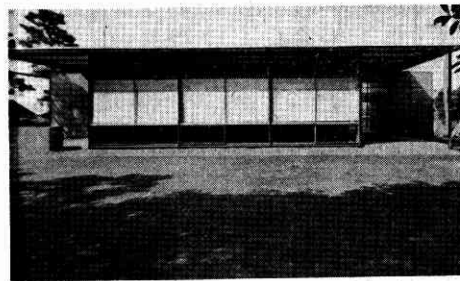
⑤



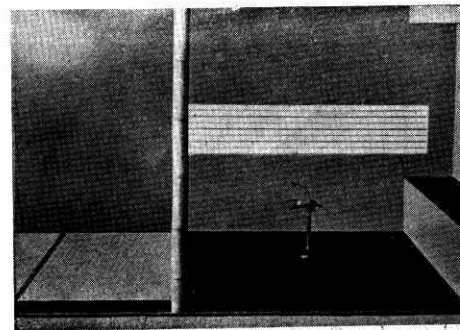
⑥



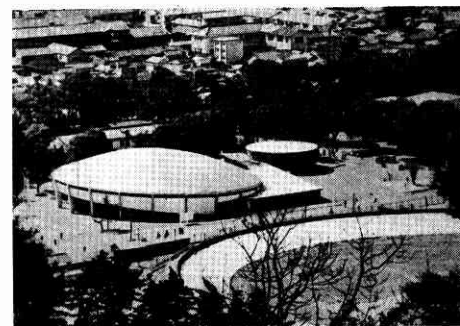
⑦



⑧



⑨



⑩

主義的（この形容詞はすこし強すぎるかもしれないが）な傾向をもつ建築家側から行われることとなった。機能に単に忠実といったような態度からは、美しい建築は創られないというわけである。こうした批判と前後して幾つかの美しい作品があらわれだした。清家清作の森博士邸（1951年）堀口捨巳作の八勝館行幸の間など、これらの作品に共通にみられることのひとつは、民主化—近代化—工業化の追及といった、それまでの行き方と代って日本の建築の伝統の再認識をせまるところがあるものであった。すなわち伝統論の登場である。

他方、こうした唯美主義的、伝統主義的な行き方に対して当然、反撃的な行き方もあった。その最も強いものはテクニカル・アプローチ（技術的合理主義とでもいえるか）を標ぼうするものである。日本の建築、特にその生産技術的な基礎の後進性を痛感して、まずその推進を現代の建築家の任務だとするものである。機能主義の一つのヴァリエーションといえるかも知れない。前川国男設計の日本相互銀行本店（1952）などがその代表例である。

こうして、この時期には機能主義に対する右と左の両方からの攻撃にはじまり、さまざまな「分裂と混乱」の現象があらわれたのである。

後期 II

講和条約（1952）による、日本の独立を契機として、はじまる後期IIは、上記の後期Iの継続ともみられないことはないが、分裂したなりに、一応落ちついてきて、それぞれの成果を突らせ、定着させようとしつつあるところが違うといえるようだ。すでに後期Iの「分裂と混乱期」において一応現われるべき諸イデオロギイはすべて登場している。近代主義と反近代主義、伝統論、テクニカル・アプローチ等々、これらは後期IIに入って、それぞれなりに一層確かな形をとっていった。

反近代主義についていうと、それは始めのころは、機能主義、近代主義に対する否定的発言としてだけ現われたが、やがてソ連建築および文化についての知識が増すにつれて「ソシアリスト・リアリズム」の建築理論として充実してきた。その積極的主張の面では古典主義的建築様式をとるということもわかってきた。ソ連の建築作品もモスクワ大学その他、典型的なものが幾つか紹介された。これらのソシアリスト・リアリズムの建築は形態感覚的に何としても旧式の感をまぬかれないので、日本の建築家からほとんど無視されてきたけれども「建築と社会との直結」という点では日本の今日までの建築が実現できないものをもっており、その存在意義は無視できない重量感をもってきた。

さらにまた唯物史観的立場にたつこの理論の長所として、資本主義社会の諸文化の社会的存在規定を冷酷なくらい的確にし、その欠陥を鋭く衝くところがある。し

たがって、こうした二つの立場の対決を通して「近代建築は「近代主義建築」として、日本の建築家に理解されるようになりつつある。つまり以前には（特に前期において）発展、拡大してこれからの建築のすべてをカバーすべきものとして無条件に肯定的に考えられていた「近代建築」が一応それに対する幾つかの対立物をもった限定された一つの建築流派（よしんばそれが好ましいものであるとしても）と考えられるようになったということである。この意識は必然的に「共存」という考えに道をあけることになった。

こうして分裂し、対立しながらも、互に他のものの存在を認めざるをえないという「分裂と共存」の時期となったのである。こうした傾向の根底にはなんとといっても世界の政治的社会的情勢があるのだろう。

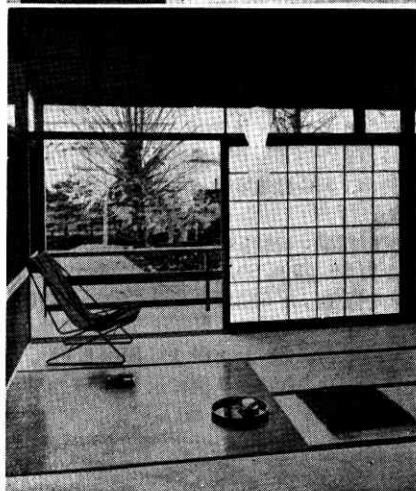
もう一つ、この時期に顕著なこととして加えておきたいのはグロピウス来朝（1954）等にみられるように、海外の建築家たちが日本の建築（桂離宮のような古典建築およびその面影をどこか伝える現代建築のあるもの、丹下健三、清家清の作品等）をきわめて高く評価していることによって日本の建築界におきている反応である。それは近代主義建築の陣営の内部に「民族と伝統」という爆弾をまともに投げこんだ形になっており、まだ論議の結末はついていないが、重要な焦点の一つである。そしてこの民族的伝統論の重大化は、これまでの近代主義建築理論とソシアリスト・リアリズム建築との、いわば「中間領域」を開拓させることになりそうである。ここにも「分裂と共存」の一つの特徴があらわれつつあるのかもしれない。このようにして今日（1955）の時点に到るわけである。ここから近い将来へ向って展望するとき一つの強力なものに統一される見込みはまずなさそうである。世界の動きは、やはりそのまま建築思潮の領域にも反映しているのである。（1955. 11. 8）

写 真 説 明

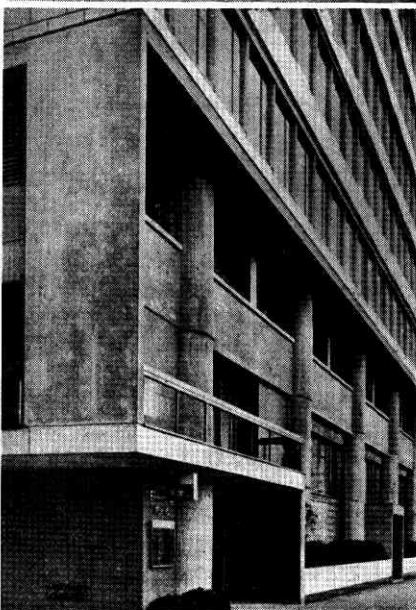
- ① 原町印刷工場 丹下健三設計（1955年）
- ② 神奈川県立音楽堂 前川国男設計（1954年）
- ③ 法政大学 大江宏設計（1952年）
- ④ 東京駅 国鉄設計部設計（1955年）
- ⑤ 清水市庁舎 丹下健三設計（1954年）
- ⑥ 住 宅 清家清設計（1952年）
- ⑦ 住 宅 會原国蔵設計（1954年）
- ⑧ 住 宅 池辺陽設計（1955年）
- ⑨ 室内構成 吉田五十八設計（1955年）
- ⑩ 愛媛県民館 丹下健三設計（1954年）
- ⑪ サンボウロ日本館 堀口捨己設計（1954年）
- ⑫ 住 宅 丹下健三設計（1954年）
- ⑬ 銀 行 前川国男設計（1952年）



⑪



⑫



⑬